

## 【研究ノート】

## 中学校教育における音楽科教育活性化に関する一考察

—音楽科を核とした合唱劇の取り組みから—

## A study on musical education activation in junior high school education:

From the point of choral drama

瀧明知恵子\*

TAKIAKI, Chieko\*

## I 研究の目的と方法

## 1. 問題の所在

少子高齢化社会が到来し、産業・経済の構造や就職の環境が変化していく中で、若年層の精神的・社会的な自立の遅れが指摘されている。中学校現場では入学してくる生徒が年々幼くなっていると感じてきた。人間関係がうまく構築できず、神経をすり減らし登校拒否に陥っている生徒、また意思決定力が低く自己肯定感が持てず、進路意識や目的意識が希薄なまま学校生活を過ごしている生徒たちも少なくない。学校現場での反社会的・非人間的な問題行動の増加などが挙げられる中で、生徒たちに確かな学力の定着と向上を図ると共に、学校全体で情操を育む環境づくり、教育活動を根付かせ、活性化させていくことが大事であると考えた。

J.L.マーセルは、「人間が安定した感情を持ち幸福な生活ができるようになるには、子どものときから知的経験に匹敵するだけの感情経験を与えること」<sup>1</sup>と述べているが、こういった考え方は人間形成の基本理念として現代社会においても考察の原点として生き続けているものである。学校だからこそ得られる音楽の感動体験を通して生涯にわたっての「生きる力」の育成を図っていききたいものである。

しかしながら学校教育において音楽科授業は実質的には減少してきていることや、学年が上がる毎に声を出さなくなる状況、音楽科授業の成立が難しくなっている現状も取り上げられている<sup>2</sup>。現行の学習指導要領では「生きる力」の理念が引き継がれている。社会のグローバル化の中で確かな学力・豊かな心・健やかな身体の調和を重視しているのである。音楽科の学習については、豊かな心の醸成を担うものとして位置づけられている。教育課程における一つのかげがえのない教科として、人間形成に関わる学力育成に貢献することが求められているのである。

## 2. 目的

中学校時代は自我に目覚め、身も心も急激に発達し知

的・情動的な興味も高まる時期であるが、ともすれば、劣等感、無気力、無関心に陥りがちな生徒たちに、人間らしい心情や感受性を通して味わう感動体験を学校の様々な場で経験させたい。

自分自身が公立の中学校現場で長年音楽を通じて教育する立場にあって感じてきたことは、音楽が様々なストレスを持つ子ども達の生活をなごませ、潤いを与えているということであり、一つの美しい音楽を創造しあう喜びや楽しさを体験させることが、日頃の学校生活を安定させ、生徒たちの意欲を掻き立てる一翼を担っているということである。

これまで取り組んできた合唱劇の取り組みでは、大編成の合唱をバックに、生徒全員が個性・特性を生かし、力を合わせて感動の世界を創りあげる。生徒自身が互いに協力し合い、ひとつの作品を仕上げていく喜びを体験する中で、音楽の素晴らしさと共に人としての素晴らしさを味わわせることができる。

音楽活動の中でも歌唱や合唱は日常的にクラスや学年全体で楽しむことができるとともに歌詞（言葉の力）を通して生徒の情緒面に深く作用するのである。音楽活動を通して感動体験を味わわせることは、一人ひとりの豊かな心を育み、生きる力を培っていくものと考えた。

そこで、現在の生徒たちの置かれている状況を把握するとともに、学習指導要領における、音楽科教育に託されたものや、意義について再確認していく。そして、音楽科教育の活性化について、これまでの長年にわたる学校現場の実践の一つであり、豊かな表現の工夫として、総合的な表現活動へ発展させた合唱劇の取り組みから考察する。

## 3. 方法

本研究は実践的方法によるものである。筆者が所属していた兵庫県西宮市において1995年から2001年にかけてA中学校とB中学校での取り組みを分析し考察した。この合唱組曲・合唱劇の取り組みでは音楽の授業と他教

\* 奈良学園大学 Naragaku University

科が連携し、教科で培った力を発展させ、個人や集団の思いを表現する。音楽の授業で基本指導を行い、クラス合唱から学年合唱の醍醐味を体感させ、さらに物語性のある大編成の合唱組曲・合唱劇に取り組みを発展させた。

表現活動の視点として

- ① 各自の役割（合唱・独唱・重唱・伴奏楽器・朗読等）への主体的な取り組み
- ② イメージをふくらませた表現活動の充実
- ③ 共に力を合わせ、より良い表現活動の創造

とし、分析の方法は指導者の観察所見、生徒の VTR 記録、発表後の生徒の意見（成果と課題のまとめ）、保護者のアンケートの読み取りを資料として検証した。

## II 学校教育における音楽科教育

### 1. 生徒の問題状況

昨今、学校現場では、いじめ・不登校・学力低下・学級崩壊などの問題が、ますます深刻化し、その原因と背景は複雑になってきている。

テレビ等で報道される青少年の凶悪な事件は、都会で起こる特殊な出来事ではなく、今や、どこにでもおこり得る事件として認識される時代である。その背景としては「子どもを取り巻く教育環境や社会環境、生活実態の変化が一つの要因となり、その学習意欲や学力、体力の低下、規範意識や生命尊重に対する意識の低下、社会的自立の困難等の状況を引き起こすに至ったといえよう」<sup>3</sup>と指摘されている。

1980 年代から社会的な問題となっている「いじめ・不登校」の問題はこれまでの教育観を大きくゆるがせていると言える。不登校生は、増加の一途をたどり、長期化し、青年のひきこもりの問題にもおよんでいる。

不登校の問題と表裏一体ともいえるのは「いじめ」の問題である。目にみえにくいいじめの問題の発見は難しく、いじめる側がいじめられる側へ転換するなど、生徒同士の対人関係は変化しやすく、教師の視点から見えにくくなっている。学校や家庭、友だち関係の中でのストレスや、不満・不安がいじめという問題に発展し、不登校の増加に拍車をかけている。そういった中で心の豊かさや情緒の豊かさといった視点で教育の在り方を見据え、子どもの全人格的な人間性を育む教育活動を進めていかねばと考える。

### 2. 現行学習指導要領<sup>4</sup>における音楽科教育

現行学習指導要領においては必修教科を中心とした教育課程の編成を特色とし、生徒の確かな学力の向上を大きなねらいとしている。音楽科では、これまで通りの授業数は確保されている。しかしながら、中学校では音楽科が授業の補充や発展的な内容を展開していた個人選択授業が無くなり、総合的な学習の時間は小・中学校とも

減少し、実質的には音楽教育の場は減少していると言える。

理念としては「生きる力」を継承し、基礎的・基本的な知識及び技能を習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力を育成するとともに、主体的に学習に取り組む態度を養うために言語活動を充実することなどをねらいとしている。そういった中で、思考力・判断力・表現力を育てていくためには、学校の教育課程の中で音楽教育を充実させていくことは大切だと考える。

音楽科では表現の内容を「歌唱」「器楽」「音楽づくり・創作」で構成し、我が国や郷土の伝統音楽に関する「歌唱の共通教材の充実」、音楽科の学習に即した言葉の活用や「共通事項」を踏まえた指導が求められている。

学習指導要領、第 1 章総則の第一「教育課程編成の一般方針」には、配慮事項として、次のような記述がある。

各教科の指導にあたっては、児童（生徒）の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力を図るうえで必要な言語環境を整え、児童（生徒）の言語活動を充実すること

各教科等で具体的には次のような形での言語活動の充実が考えられるとあり、

（2）コミュニケーションや感性・情緒の基盤となる言語力として、例えば、  
①体験から感じとったことを言葉や歌、絵、身体などを使って表現する（音楽、図画工作、美術、体育等）  
③合唱や合奏、球技やダンスなどの集団的活動や身体表現などを通じて他者と伝えあったり、共感したりする。（音楽、体育等）

今回の改訂の教育課程全体における重要なポイントとされる「体験と言葉の力」について、本論における合唱劇など体験に基づく表現活動を充実発展させていくことは、生徒の意欲や創造力の育みとなっていくものと考えられる。音楽科の改訂の要点としては下記の事項が挙げられる。

1. 内容の構成の改善・・・表現および鑑賞に関する能力を育成する上で共通に必要な「共通事項」を新たに設けた。
2. 歌唱教材の提示
3. 我が国の 伝統的な歌唱の充実
4. 和楽器を取り扱う趣旨の明確化
5. 創作の指導内容の焦点化・明確化
6. 鑑賞領域の改善
7. 自己のイメージや思いを伝え合ったり、他者の意図に共感したりできるようにする。  
また、音楽に関する用語や記号などについて、小学校に示す音符・休符・記号などに加えて示す。

健やかな身体や豊かなこころを育むというねらいの下、子どもの全人格的な人間性を育成していくために、これまでの授業を見直し、新学習指導要領における音楽科の在り方を考察し、活性化させていかなければと考える。

### 3. 総合的な学習と音楽科教育

平成10年の学習指導要領の改訂において、「総合的な学習の時間」が創設された。第15期中央教育審議会答申では3つの活動例を掲げている。

- ① 国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な課題
- ② 児童生徒の興味・関心に基づく課題
- ③ 地域や学校の特色に応じた課題

①において音楽科は補助的な関わりが可能であるが、②、③においては中心となって活動を充実・展開することができる。

平成10年の学習指導要領より、音楽科は実質的に授業数が減じられている。しかしながら、「総合的な学習の時間」の中で、横断的・総合的な指導を行うことが提言され、音楽科からも様々な理論や実践が提案されている<sup>5</sup>。音楽科の活動を広げていくためにも積極的に関わっていく姿勢が必要である。

山本文茂は「総合的な学習における音楽科の基本構想は、音と言葉と動きを表現媒体としたコミュニケーションの実現を目指すものでなくてはならない」<sup>6</sup>としている。具体的な提案として「モノドラマ合唱」を中心とした実践を提案している。「モノドラマ合唱」とは「国語教材に取材した『語り』に『バックサウンド』をつけこれを『バックミュージック』で接続的に包み込む・・・以下略」、また、「モノドラマ合唱では特に音楽科と国語科の関係を重視しているが、この方法原理を体育科や図工科との関連に拡大して適用していけば『ミューズの表現』の理想は必ず実現されると考える。」<sup>7</sup>と述べている。

筆者は音楽科を核とする総合的な学習について実践研究を進めてきている。音楽表現活動を主体とした音楽の授業や選択授業の発展として、行事とリンクさせ、これまでも実践してきた合唱組曲や合唱劇である。「総合的な学習の時間」が設置されてからは、各教科と連携し、学年や学校全体で協力してつくりあげるこれらの取り組みを、より充実発展させた形で実践研究を行ってきた。

### 4. 学校行事と音楽科教育

学校全体で取り組む行事は、心豊かにたくましく生きる力を育む大切な活動である。文化祭や音楽会などで音楽科の活動を広げ、深め、歌声の響く学校づくりを目指していきたいものである。1年間の学校生活の中で、音楽活動は学校行事や生徒会行事において、行事そのものを充実させ豊かな活動に盛り上げている。斉藤喜博は「授

業」と「行事」と「芸術教育」とは学校教育での3つの大きな柱であり、いずれも広い意味で学校教育での授業であると述べているが、今日もなお生き続ける教育活動の原点であると考える。<sup>8</sup>

様々な行事においては教科の時間に取り組んだ学びを発表する場であり、異学年集団の学びの場でもあると共に感動と絆を育む活動となっている。保護者や地域の方々との交流の場ともなり、生徒が全力を尽くした取り組みに声援をいただき、生徒への大きな励みとなっている。心をゆさぶる、人としてもっとも大切な心の育みを行なっていく取り組みである。

行事の中でリーダーが育ち、特に最高学年は先輩として素晴らしい手本を後輩に示す場であり、自己有用感、達成感に満たされる。下級生の手本となれるよう、練習の積み上げにも力が入る。素晴らしい取り組みに感動した後輩たちは、来年はそのレベルに達したいという意欲の原動力となる。このように好循環となって、学校文化が引き継がれ高められていくのである。限られた時間の中で基本は授業でしっかり指導し、学級・学年で協力しあった取り組みを充実させ音楽的行事を成功させていきたいものである。

生徒一人ひとりの可能性を具体的に開く創造的な授業の実践とともに、感情や情緒を育み、心を豊かにするための教育活動を進めていかなければと考える。

### 5. 授業の概要と実施

#### (1) 合唱劇への取り組み

大きな声で生き生きと歌うことは、生徒の学校生活を充実させ、生徒の心をより強く、より豊かに育てている。合唱活動では、仲間と声を合わせて一つのもので作り出すことに喜びを見いだせた時、生徒たちの心は大きな感動に包まれる。

一人一人が仲間と歌声を合わせ、心を合わせて歌うことで、大きな感動を生み、歌い終わった後の余韻が心を育んでいく。このような感動体験を味わわせることで、一人一人が自分の存在に自信と誇りを持ち、たくましく生きる力を培っていく。

合唱活動の発展としての合唱劇の実践は、小学校を中心に音楽劇というかたちで、かなり以前から行われている。また、近年ではミュージカルやオペレッタという名称で行われている。「総合的な学習の時間」が設置されてからは、他教科と連携しあい、音楽科を核とした総合的な表現活動として広く行われるようになったのである。

歌唱・合唱は器楽と違って、演奏しながら別の動作をすることが容易である。また歌うだけでなく演ずるということは、物事を注意深く観察する姿勢を養い、より豊かな表現力を培うのである。

これまで筆者が実践してきた合唱組曲・合唱劇の取り

組みでは、合唱を中心とするが、独唱、重唱の場面を取り入れるなど、生徒の個性・特性を発揮させ、より豊かな表現を目指すのである。伴奏はピアノで作曲されているものが多いが、生徒に演奏しやすく編曲したり、朗読のバックのピアノ演奏を加えたり、ピアノだけでなく、生徒が取り組みたい楽器の楽譜をつくるなど創意工夫を重ねてきている。

音楽には共に演奏することで連帯感を持たせる力がある。孤独感を抱きやすい思春期の中学生には、前向きに生きるエネルギーになるこの連帯感が必要である。しかしながら限られた時間数で、生徒が心揺さぶられるような一体感を感じる授業を成立させるためには他教科や学校行事と連携しながら計画的に行っていく必要がある。

## （２）指導構成

題材 合唱劇「象列車」  
作詞 清水 則夫  
作曲 藤村 記一郎

この作品は子どもの幸せと平和を願う思いを込めて、実話をもとにして書かれた「ぞうれっしゃがやってきた」を新しい合唱劇として創作したものである。東山動物園 50 年、国際平和年など節目の年に創作し初演されているが、命の尊さ、平和の大切さ、人間の優しさ、勇気、夢を育むことの大切さ、未来への展望を持って生きることなどを歌い上げている。

この実話の素晴らしい内容は歴史的価値の高いものであり、戦争に対する危機感・平和への熱い思いが伝わってくる作品である。合唱構成の作品としても価値あるもので、物語に沿って 11 曲の合唱、独唱、重唱、朗読など

からなる。多様な表現活動を取り入れ、歌詞の内容にふさわしい伴奏をさまざまな楽器を入れて工夫することもできる。作曲者の藤村記一郎が後に、吹奏楽の伴奏も加えて作曲をしており、吹奏楽部の出番を作ることで、より総合的な表現となる。他にもシンセサイザー、ドラム、ギター等も編成することができる。表現する側も感動体験を共有し、感性を高めることができる。

## （３）指導目標

### <総合>

- (a) 国際平和年、東山動物園 50 周年の年に記念として、創作された合唱劇を取り上げることにより、歴史の事実を学習し、命の尊さ、平和の大切さ、人間の優しさ強さ、勇気、夢を育むことの大切さを知らせる。
- (b) 創造的な学習活動を通して主体的に取り組む態度を育成する。
- (c) すぐれたもの、美しいものに触れ感動できる豊かな感性と心情の育成。
- (d) 感動体験を共有することを通して、連帯感を育成する。

### <音楽科>

- (a) 音楽活動の喜びを味わわせ、音楽性を伸長する。
- (b) 音楽を愛好する豊かな感性を育成する。
- (c) 生徒の個性や能力を多様な表現活動を通して生かすとともに、さらに一層伸長する。



--	--	--	--

次	学習内容	時	生徒の活動	教師の支援
1	合唱劇の概要を知る (総合)	1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・オリエンテーション</li> <li>活動内容を知る</li> <li>原作のビデオを鑑賞する</li> <li>・物語の内容を理解する</li> <li>・朗読の仕方を理解する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・活動方針や内容に関する共通理解をさせ、協力体制作りをさせる。</li> <li>・物語の内容・歴史的背景を理解させ、興味・関心を持たせる。</li> <li>・朗読の仕方について助言する。</li> </ul>
2	合唱・合奏の受け持ち決定 (音楽科)	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・合唱・伴奏楽器の分担を決定する。</li> <li>・合唱の各自のパートを決定する。</li> <li>・伴奏楽器担当者を決定する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・意欲を持って取り組めるよう創意工夫する。</li> <li>・それぞれの生徒の特技や個性が生きる選択をさせる。</li> </ul>
	音楽表現を支える基礎的、 基本的内容を培う技能を 伸ばす。(音楽科)	3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・練習開始。それぞれのパートリーダーを選出し、リーダー中心に練習する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・希望で決定させるが、助言を入れる。</li> </ul>
		4	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各パートのメロディーを美しく歌う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・リーダー選出にあたっては、安易な方法にならないよう助言する。</li> </ul>
		7	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各楽器の基本的奏法を身につけながら、自主的に練習する。(伴奏パート練習)</li> <li>・独唱・重唱練習に主体的に取り組む</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・正しい呼吸の仕方、共鳴のさせ方について助言する。</li> </ul>
		8	<ul style="list-style-type: none"> <li>・パート合同練習・全体合唱練習を指導者中心に行う</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各自の役割や特技を生かした取り組みをさせる。</li> </ul>
	合同練習を行う それぞれの楽曲の内容を いかに表現するのか、感情 移入を目指した表現力を つける。(総合)	10	<ul style="list-style-type: none"> <li>・伴奏楽器を入れ、合唱練習を行う。</li> <li>・独唱・重唱を入れて合唱練習を行う。</li> <li>・合唱劇の流れにそって、協力して美しいハーモニー作りをする。</li> <li>・朗読・合唱・器楽伴奏との合同練習。</li> <li>・学生代表の指揮者を中心に学年の仲間が一体となり、協力して取り組む。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒が主体的に練習し、教え合い協力しあって、活動できるように助言する。</li> <li>・ハーモニー、リズム、曲想等についての助言を入れる。</li> <li>・物語の内容にふさわしい表現ができるよう工夫させる。</li> </ul>
3	総合的な表現活動を目指す。 (総合)	11	<ul style="list-style-type: none"> <li>・リハーサル</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学年代表の指揮者を中心に、組曲の流れにそって、取り組ませ、物語の内容にふさわしい総合的な表現を工夫させる。</li> <li>・適切な助言を入れ、練習の成果を思う存分発揮できるよう声かけをする。</li> </ul>
		12	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本番</li> </ul>	
4	合唱劇の発表による充実感、達成感を味わわせると共に共通の感動体験を通して連帯感を高める。 (音楽科)	13	<ul style="list-style-type: none"> <li>・取り組みの反省を個人・クラスで行い、まとめとする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・取り組みの成果、課題を今後の活動に生かせるよう話をする。</li> </ul>

## （５）コアカリキュラム

- (a) 音楽科を中心に関係の教科が、時期・内容  
分担・時間数等についての検討会を行う。
- (b) 各教科が年間計画の中に、「総合的な学習の時間」  
に関わる内容に必要な時間を確保しておく。
- (c) 「総合的な学習の時間」は学年全体で行うので、学  
年の教師全員が参加する。

流れ	曲名	活動内容	教科
1	物語の内容	・朗読	・道徳 ・国語科
2	合唱 「サーカスの 歌」	・混成４部合唱 ・ピアノ伴奏 ・フルート・ オーボエ ・クラリネット ・朗読・・・団長	・音楽科 ・国語科
3	独唱 「象を売らな いで」	・ソプラノ代表 ・ピアノ独奏・ 伴奏 ・オブリガート ・・・フルート ・朗読 ・・・動物園の園長	・音楽科 ・国語科
4	合唱・重唱 「雪よふるな」 楽曲の内容の 説明	・混成４部合唱 ・ピアノ独奏・ 伴奏 ・オブリガート ・・・フルート	・音楽科 ・道徳
5	朗読「動物園へ ようこそ」	・朗読 ・・・子ども達	・国語科

## Ⅳ 分析と考察

### １．分析

視点

① 各自の役割（合唱・独唱・重唱・伴奏楽器・朗読 等）への主体的な取り組み
② イメージをふくらませた表現活動の充実
③ 共に力を合わせ、より良い表現活動の創造

総合的な表現活動である合唱劇に取り組む課程で、生徒たちが、それぞれの持ち場で主体的に活動し、様々な課題を解決していく姿や、表現力、コミュニケーション能力を育んでいく姿を観察することができた。

取組み後、自己評価とともに感想・意見をまとめさせた。その結果、多くの生徒が達成感・充実感に満たされた様子がうかがえる。以下、取り組みを終えての生徒の

感想・意見を紹介する。

- ・「声がすごく出ていてうれしかったです。混成４部で、すごくハモっているところもあり、練習の成果が良く出ていたように思います。３年間いろんな組曲をやったけれど、今回の合唱劇は本当に詩について深く考え、願いや気持ちをこめて歌えたと思います。聴いていた人たちに歌声が届くだけでなく、気持ちも届き、大成功だったと思いました。」３年・女子
  - ・「歌っている僕自身、毎回さむけがする部分があるほど、心がこもった歌だと思います。だから聴いている人たちもとても、身動きができないくらい感動したと思う。何度も歌を歌っているが、さむけがするなど一度もなかった。さむけというのは悪いですけど、何か熱いものがおなかの中からこみあげてくるのです。こんなに心を打つ歌を歌ったのは初めてです。初めは恥ずかしいと思ったけれど、そんなことはない。素晴らしい取り組みと素晴らしい発表でした。」３年・男子
  - ・「私は『象列車』を歌って、生まれて初めて人に聞かせる歌を歌った気がしました。私たち３年生の歌を聴いて、泣いている人を見た時、すごくうれしい思いが込み上げてきました。このメンバーでこの学校で、この歌で本当に良かったと心から思いました。『この歌をここまで歌いこなし、人に感動をあたえられるのは、私たち３年生しかいない。』とそう思います。この先、こんな形で合唱劇を歌うことなんて多分一生ないと思います。本当にすばらしい思い出です。」３年生・女子
- その他

- ・「歌い終わった後、いろんな気持ちがこみ上げてきた。歌いきったぞという達成感、昼休み頑張った独唱練習を思い出した。最高の発表ができた。」
- ・「器楽アンサンブルでフルートがうまくいって、本当に良かった」
- ・「いつか、指揮をしてみたいと思った」
- ・「私たちの音楽を伝えられた。クラスや学年の仲も深まって、練習してきて本当に良かった」

他の教科と連携し音楽科を核とした総合的な表現活動に取り組む中で、生徒たちは仲間と協力して活動する大切さを学びとっていることが、感想や意見から伺える。また、教科の学びだけでは得られないより豊かな学びがあり、総合的な力の向上を生徒自身が実感している。こういった取り組みは、その後の学校生活に変化を与えている。クラスや学年の仲間との連帯感が育まれ、日頃の生活に意欲的になり、授業に取り組む態度にも良い影響を与えている。

表現活動の基盤となる合唱については、大人数での合唱は、歌うことを苦手とする生徒にとっては安心して歌い、その美しさを共有できる場であり、自信を持たせることにもつながっている。独唱や重唱を含め、歌詞を読

み取り合唱するだけでもイメージを促すことはできるが、演じること、物語に入り込み劇化することで生徒たちの内面にある感性を刺激するのである。

生徒たちはイメージをふくらませ、自分の思いや感情へと発展させる。生徒が感じたことを自由に表現することを多くの場面で体験している。教師のイメージを初めから前面に出すのではなく、主体的な表現活動を大切にすることで、生徒自身のイメージが自由に広がり、発表後の満足感、成就感を生み出している。

楽器演奏については、シンセサイザー、フルート、オーボエ、クラリネット、バイオリン、ギター、ドラムなど、生徒のやってみたいという意欲を大切に、楽器を加えていった。演奏しやすく編曲するなど、工夫を重ねることで、様々な楽器演奏が加わり、合唱劇はさらに豊かな表現ができるようになった。このように生徒が主体的に意欲的に取り組むことによって、さまざまな表現力を高め、身につけることができるのである。

一方、文化行事において、学年を超えてそれぞれの発表を鑑賞し合うことで、互いに触発され、より良い作品を生みだそうとする原動力となっている。その中で学校全体の取り組みの質が向上していき、学校文化となって引き継がれていく。これらの取り組みは、生徒の情操を育み、人間形成に大きく関わっていく。

次に、共に取り組んだ他教科の教員からの意見を紹介する。

- ・「総合的な学習の時間で、学年がそろって練習するのは、本当に集中できてよいと思う」
- ・「学年合同練習はとても良い刺激になるようで、その後の成長が感じられる良い取り組みだと思いました。」
- ・「少し練習時間が少なく感じました。もう少し早くから練習にはいれると良いと思う。総合的な学習の時間での合同練習は、とても活動しやすく続けて欲しいと思います。」
- ・「3年生の頑張りが伝わってきて、気持ちの良い合唱でした。生徒たちをほめてやりたいです。」
- ・「各学年の生徒たちの頑張る姿に感動しました。特に3年生の取り組みは学年が上がる毎に声量、響き等が素晴らしく、合唱劇を感動的なものにしていました。」さらに、保護者や地域からの感想を紹介する。
- ・「いつもながら、ステージ発表はすごい、素晴らしいの一言につきます。今年もステージ発表に、思わず涙が出て、感動させていただきました。ご指導いただきました先生方にも感謝いたします。」
- ・「楽器の担当で、毎日毎日、発表のための練習をしていました。自分の為、ではなく、みなさんの為に努力すること、とても良い経験になったと思います。」
- ・「文化祭の近づいた日、学校に出向くと、子どもたちが教室や廊下で集まって練習をしているのを見て、が

んばろうとしている姿が心に響きました。」

- ・「3年生の合唱劇は、みんなと一緒に全力を尽くそうという思いが感じられ、大変感動いたしました。」
- ・「保護者の方や地域の方が来場され、多くの人々に守られて成長していくのだなあと思いました。」

など、文化行事では、会場が一体感に包まれ、感動を共有している様子が感じとれる。保護者からは生徒の熱演に感動し、励まされたり、エネルギーをもらったと喜びを表した文章が多く見られた。生徒たちの歌声が保護者や地域にとって、楽しみの一つになっているという意味では、地域の文化として浸透し、根付いていると言える。学校文化から地域の文化へと広がり、定着していくことを願っている。

## 2. 考察

合唱劇は音楽を通して、ストーリーの流れや登場人物の心理とその変化や場面の描写等を総合的に表現していくものである。

音楽科の学習指導要領の歌唱領域ではしばしば、心情・情景を「イメージ」して歌うということが指導計画に用いられる。歌詞から得たイメージから発生させる活動が多い。歌唱表現において音楽的思考を発揮させるために、演じることが大きな効果をもたらすと考える。本来、より豊かな歌唱表現のために歌詞や楽譜を何度も読み込み、言葉・音符などから「イメージ」をふくらませていくものである。物語性があることで、子どもたちが抱く歌唱表現のための「イメージ」は物語から発生するため、物語の世界に同化し「イメージ」ができあがる。歌詞を読み取り合唱するだけでもイメージを促すことはできるが感情移入し朗読することや、演じること、視覚化・体現化し、生徒たちのうちにある感性を刺激するのである。

人は音楽を聴くことにより、うれしくなったり、悲しくなったり、いろいろな心の動きを経験している。合唱活動では仲間と声を合わせて一つのものを作り出すことに喜びを見いだせた時、生徒たちの心は大きな感動に包まれる。このような多くの感動体験を通して生徒たちの音楽に対する感性がより育まれる。こういった感動体験によって、生徒一人ひとりが、「自分の存在に自信と誇りを持つこと」につながっていくのである。音楽がわかることの楽しさ、できることの楽しさなどを学校で感得させることが大事だと考える。

## V まとめと今後の課題

学校現場に長年勤務してきた者とし学校教育に音楽教育は欠かすことのできないものと確信している。個性や創造性を発揮することが求められつつある中で、生徒一人ひとりの多様な能力の伸長を目指すという観点からの

対応を図り、心の豊かさや情緒の豊かさと言った視点で教育の在り方を見据えていかねばならないと考える。

多くの中学校が力を入れている合唱活動では、学級・学年・学校全体で心を合わせ鍛え合い、美しいハーモニーを創り上げる感動体験から、連帯感、達成感を育んでいる。合唱コンクールや文化祭等は保護者、地域の方々に生徒の全力を尽した取り組みを鑑賞していただく中で、大きな声援をいただき、豊かな時間を共有する場となっている。こういった活動が学校への信頼へとつながっているのである。

皆川達夫は、皆で声をあわせて歌う、つまり＜合唱する＞ということも、人間が何らかの形で集団あるいは社会を作りはじめたのと同時に、始まったものと考えられること、＜合唱する＞ということは、＜歌う＞ということと＜集団を作る＞ということ、人間のもっとも基本的な行為に、深く根ざしたものなのである、と述べている。<sup>9</sup>

このように人間の根源的な活動である音楽活動は学校の生活全体を豊かで潤いのあるものとするとともに、情操豊かな生徒を育む土壌ともなっている。限られた時間数ではあるが、音楽科（基礎・基本の習得）の時間を核として、学活行事や総合的な学習の時間において、音楽活動を発展させていかねばと考える

現代社会では、マスメディアが発達し生徒たちのまわりに、様々な音楽が氾濫し、音楽はもはや学校教育で扱う必要はない。生徒はすでに種々に存在する音楽から十分に影響を受けているという声もあるが、それで満足して良いはずはない。それらの中には、生徒たちに美的情操を与えるものではないものも多く存在し、時として、退廃的な気分を起こさせてしまうものもある。学校教育の中で多様な音楽を提供し、体験させ、生徒が生涯に渡ってより豊かな様々な分野の音楽を楽しむための基礎を養うことを目指した音楽教育を実現していくことは非常に大切なことと思う。より充実した音楽活動を展開するべく授業における指導の工夫と研究を積み重ね、今後どのような音楽活動が適切なのかよく吟味し指導の系統化を図っていかねばと考える。

教育現場では、ともすれば必修授業の縮小や学校行事の精選の名のもとに音楽会やコンクールの中止など徐々に学校教育における音楽科の位置がせばめられていくのが現状である。しかしながら、授業だけでなく、学校行事である合唱コンクール・学年合唱・全校合唱・合唱劇・学級歌コンクールなど、教科学習を基盤とした発展的な実践としての活動は音楽科として見過ごすことのできない活動である。学校教育全体計画の一環として意図的に計画的に対応することも大切であり、このような活動が音楽活動の内容充実を図る要因となりうるものである。

最後に、学校の音楽教育を充実・発展させていくためには、まわりの教職員の理解協力を得ながら、学校全体で進めていくことが大事である。そのためにも、学校において音楽教師が音楽科の経営を充実させ、担任・クラブ顧問としてや、校務分掌上の担当等を責任を持って果たすことである。また、学校行事等における音楽系クラブの活躍、学級・学年の合唱活動、音楽科として校内放送の充実等、学校全体の中で情操教育に関わる重要な位置を担うことが大切である。

#### ＜ 引用・参考文献 ＞

- 1 Mursell, J. L., *Human Values in Music Education*, Silver, Burdett and Company, 1984＝美田節子訳『音楽教育と人間形成』音楽の友社, 1967, p.39.
- 2 次の文献を参照のこと。①立石裕子「中学校音楽科における歌唱・合唱活動の在り方に関する一考察」『音楽文化教育学研究紀要(広島大学大学院教育学研究科)』17, 2004, pp.181-195, ②西園芳信・小椋里美・川畑啓子「子どもが歌いたくなる合唱指導の方法」『学校音楽教育研究：日本学校音楽教育実践学会紀要』12, 2009, pp.22-23, ③千成俊夫「音楽の授業成立に関する一考察」『北海道大学教育学部紀要』25, 1975, pp.191-203.
- 3 梶田叡一、山極隆『教育の最新情報』ミネルヴァ書房, 2009, p.9.
- 4 文部科学省『中学校学習指導要領音楽科編』, 2008
- 5 次の文献を参照のこと。①加藤富美子『横断的・総合的学習にチャレンジ』音楽之友社, 1997, ②八木正一・吉田孝編著『音楽の授業』学事出版, 1998, ③加藤靖編著『音楽で拓く総合的な学習』教育芸術社, 1999.
- 6 山本文茂「教育課程の方向と音楽科の役割」小原光一・山本文茂監修『音楽教育論』教育芸術社, 1998, p.4.
- 7 山本文茂「モノドラマ合唱の教育的可能性」目黒惇編『音楽の発見「ミューズの表現」』音楽の友社, 1997, p.109.
- 8 斉藤喜博『授業』国土社, 1963.
- 9 瀧明知恵子『新学習指導要領実施 活気あふれる学校づくり』株式会社 ERP, 2014, p.49.
- 10 皆川達夫『合唱音楽の歴史』全音楽譜出版社, 1965